

校長室

2021.6.14

毎朝、生徒が登校してくる時間に合わせて、校門入り口に立っている。その際には、吾妻連峰が視界に入る。校長室の自分の椅子に座る。窓は左手の方にある。そこから見える景色は、安達太良連山である。

肉眼で確認できる残雪の面積が小さくなっていくのとは反対に、緑が濃くなってきた。青空と雲とのコントラストがなかなかである。いい季節になってきた。

校長室には様々な機能がある。来客対応としての応接室的機能、少人数での話し合いの際の会議室的機能、機密事項を扱うための密室的機能、そして、校長があれこれと考える作戦本部的機能である。加えて、生徒が相談にくる相談室的機能もある。

これらは、職員室に校長の席があったのでは、機能しないであろう。やはり、校長室という空間が必要なのである。どうやら、校長室に校長が一人でいる理由はあるようである。

以前、奥会津の小学校の校長室の主をしていたことがある。窓からは、眼前に迫る山々がよく見えた。紅葉シーズンのことである。あるとき、朝と夕方、紅葉が進んでいることに気づかされた。次の日、今までよりも観察という意識で山々を見ていたところ、大げさではなく、1時間ごとに紅葉が深まっていくのがわかった。これには、驚かされた。刻々と変化するといった具合である。

さすがに、今は安達太良連山との距離がありすぎる。それでも、残雪と緑の深さは認識できる。安達太良山と言っても、福島盆地から見える、一見頂上らしき頂は、安達太良山の頂上ではない。頂上は、もう少し左に目をやると見つけることができる。

安達太良山が、一番その魅力を出してくれるのは、郡山や本宮、二本松からの眺望であろう。高村光太郎の妻である智恵子が見た安達太良山である。福島からの眺めとはまるで違う。きれいな山並みである。

ずっと安達太良山を眺めているわけではないし、目の前の田んぼの様子を注視しているわけでもない。仕事の合間に、ふと田んぼや山々を見ながら考えが浮かぶことがある。作戦本部的機能である。これが大きい。職員室では、こうはいかない。

野田中学校の校長室は、職員室と離れている。このパターンは3度目なので慣れてはいるが、いろいろと容易ならざることがある。職員室と校長室が隣同士であれば、いろいろと便利なのは確かである。離れていると、教頭先生に聞きたいことがあっても、「まあ、いいか」となってしまうことがある。結局のところ、一日に何度も職員室に出向くことになる。

これからも、安達太良山の季節の移ろいを眺めながら、作戦本部にて思案に暮れる日々を送ることになりそうである。まだ自分にとっての新しい校長室はしっかりとほきていない。レイアウトをこうしようか、この方が使いやすいかなどと考えている。まだ落ち着かない。本調子ではないということである。もうしばらく時間がかかりそうである。校長室が機能し、エンジン全開となる頃には、安達太良連山の残雪もほとんどなくなっていることだろう。